

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530896

研究課題名(和文) 出産を控えた夫婦に対する子育て支援に関する臨床心理学的研究

研究課題名(英文) Relationship between the anxieties of expectant mothers and the patterns of attachment

研究代表者

内田 利広 (UCHIDA, toshihiro)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20263999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：出産を控えた妊婦150名へのアンケート調査を行った。各尺度の分析の結果、妊婦の意識については、「出産への肯定感」「出産への不安・苛立ち」の2因子、夫の関わりへの意識については、「肯定的関与」「家事の分担」の2因子が抽出された。妊婦の就労について、仕事を辞めた妊婦は、出産に対する不安・苛立ちが高くなり、また人との親密な関係は持ちにくい傾向にあることが示された。愛着との関係では、親密性と見捨てられ不安の組み合わせにより、出産への肯定感や夫の肯定的関与が異なって受けとめられている。また、インタビューにより、妊婦の意識の変化に、夫との関係性が影響していることが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to discuss the consciousness of childbirth and child rearing from the point of the patterns of attachment of expectant mothers and the involvement of their husbands. 150 expectant mothers were surveyed.

Results of factor analysis, about the consciousness of expectant mothers, 2 factors ("Affirmation for childbirth" and "Anxiety and irritation for childbirth") were extracted. About the consciousness of husbands, 2 factors ("Affirmative involvement" and "Assignment of domestic affairs") were extracted. Affirmative involvement of husbands had an interaction, and in the group of Abandonment anxiety, higher familiarity group felt more assignments of domestic affairs. The combination of the familiarity and the anxiety, the affirmation for childbirth and affirmative involvement of husbands are accepted differently.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：子育て支援 妊婦 夫婦関係 内的作業モデル 出産 家事

1. 研究開始当初の背景

1980年代後半から日本でも取り組まれてきた乳幼児精神保健や発達心理学の研究において、母乳幼児の母子関係の研究が主であった。それは今日ますます盛んになり、書籍においても愛着に関する文献がいくつ出版されるようになり(たとえば、数井・遠藤2007、藤岡2005、渡辺2000、マイケル・高橋2007)また2008年には、日本において第11回世界乳幼児精神保健学会世界大会が開催され、乳幼児期の愛着の問題が、世界中で様々な角度から取り上げられ、論議されていた。

2. 研究の目的

本研究は、早期母子関係において形成される愛着関係(内的作業モデル)が、何らかの要因によって、十分に築いていくことができず、機能不全に陥っている家庭に対し、まずはその実態を把握し、支援の方法を模索するものである。愛着障害については、これまでも多くの研究があり(ザメロフ/エムディ編、小此木監訳、「早期関係性障害」2003)愛着障害のタイプやその支援について様々な提案がなされている。

本研究において注目するのは、そのような母子関係を形成している家族のありようであり、特に父親との関係を含めた父親-母親-子どもの3者の関係性である。夫婦において、初めての子どもの出産は、多くの不安や戸惑いを覚えるものであり、また母親になること、父親になることへの心理的な準備は、おそらくその妊娠期間から始まっていると考えられる。そこで、本研究では出産を控えた母親及び父親に対し、妊婦検診等の機会を利用し、妊娠期間から始まる親になるプロセスについて、詳細に検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) アンケート調査

今回調査をお願いしたのは、福井県のある市の健康管理センターに妊婦手帳を取りに来た妊婦約200名にアンケート用紙を渡し、64名から回答を得た。また近隣の産婦人科に妊婦健診に訪れた妊婦200名にアンケート用紙を渡し、86名から回答を得た。最終的な有効回答は、計150名(平均年齢30.7歳、平均妊娠週19.5週)であった。

質問紙:アンケート用紙は以下の3つの部分から構成された。

妊婦の出産や子育てに関する質問項目 40項目

愛着パターンに関する項目 30項目

妊娠期の夫の関わりに関する項目 30項目

妊娠中の夫の発言や態度で、嬉しかったことと嫌だったことを自由記述として記入してもらった。最後に、インタビュー調査への協力の可否について、回答してもらった。

・分析方法

分析においては、次のような属性の分類により、以下の分析を行った。

年齢(26歳以下、27歳~33歳、34歳以上)
家族構成(核家族、拡大家族)

子どもの出生順位(第1子、第1子以外)

就労状況(専業主婦、常勤職、非常勤職、退職等)を独立変数とし、妊婦の意識(肯定感・不安苛立ち)、愛着パターン(見捨てられ不安・親密性)、夫の関わり(肯定的関与・家事の分担)の尺度得点を従属変数として、分散分析を行った。

(2) インタビュー調査

方法の選択

妊娠にともなう妊婦やその家族において、どのような意識の変化が生まれるのかを、主観的な体験を中心に検討したいと考えたため、インタビュー調査による質的研究方法を用いた。具体的には、半構造化面接により得られたデータを、分析対象とした。データの分析においては、修正版グランディッド・セオリー・アプローチを用いた。

対象者

対象となる妊婦は、まず筆者が先行して行っていた妊婦へのアンケート調査において、インタビューへの協力をお願いし、それに応えていただいた方に、こちらからアポイントを取り、インタビューを実施した。対象者は、妊娠24週~36週の妊婦5名を対象とした。

インタビューの手続き

インタビューは、すべて筆者と筆者の研究室に所属する大学院生(女性)の2名で行った。時期は、2012年7月~2013年7月までの間に実施し、時間は約60分であった。なお、インタビューの場所は、できるだけ調査対象者の負担を軽くするため、対象者の自宅又は職場のいずれかで、選択してもらった。

インタビューでは、まず本研究の趣旨とプライバシー保護と情報の管理、録音の許可等について、文書にて説明を行い、同意書という形で承諾を得た。インタビュー項目としては、以下のような内容であった。妊娠が分かった時の気持ち、妊娠中にしんどかったこと、うれしかったこと、妊娠が分かっただけからの夫の言動とそれへの気持ち、妊娠が分かっただけからの夫婦の関係、妊婦の妻を抱える夫に、やってほしいこと

分析の手続き

インタビューのデータは、すべて逐語録を作成した。その逐語録を基に、分析テーマを設定し、そのテーマに従って、分析ワークシートを作成し、概念の生成を行った。

4. 研究成果

(1) アンケート調査の分析結果と考察

各尺度の因子分析の結果

・妊婦の意識について

因子分析の結果、2因子が抽出され、第1因子は、母親になることへの充実感や育児への

自信に関する項目であり、「出産への肯定感」と命名した。第2因子は、やる気がなくなることや苛立ち、気分がのらないというような項目であり、「出産への不安・苛立ち」と命名した。

・愛着パターンについて

愛着に関するIWM尺度では、先行研究と同じく、2因子が抽出され、「見捨てられ不安」「親密性」と命名した。

・夫の関わりへの意識について

夫の関わりに関する項目も因子分析を行ったところ、2因子が抽出され、「肯定的関与」と「家事の分担」と命名した。

妊婦の意識、愛着パターン、夫の関わりを従属変数とした分析の結果と考察

・妊婦の年齢による意識の差異

見捨てられ不安は、高年齢群(34歳以上)が、低年齢群に比べて高い。これは、年齢が高くなっての出産となると、今後の育児への不安も高まり、今後成人するまで育てていけるだろうかという不安の高まりの中で、見捨てられ不安も高まるのではと考えられる。

次に、夫の肯定的関与と家事の分担が、ともに高年齢群に比べ、中年年齢群が高く、この年代の夫は、よく関わってくれている。この年代は、初めての子どもであり、夫も献身的に関与してくれると考えられる。一方高年齢群になると、母親自身も第2子以降であったり、夫もやや高年齢で仕事が忙しく、なかなか家事の分担や関わりは薄くなるのではと考えられる。

年齢	26歳以下 (26人)	27~33歳 (83人)	34歳以上 (45人)	F値
肯定感	3.74	3.72	3.65	.37
不安・苛立ち	3.30 (0.29)	3.29	3.19	.14
見捨てられ不安	2.17	2.62	2.96	5.13**
親密性	3.32	3.37	3.35	.09
肯定的関与	3.91	3.98 >	3.58	4.39*
家事の分担	3.03	3.18 >	2.99	4.07*

・家族構成による差異

核家族が、愛着パターンにおける親密性得点が高くなっているが、これは、むしろ親密性が高い妊婦は、もともと夫も親密な関係を形成し、夫婦だけの生活つまり核家族を形成していると考えられる。

家族構成	核家族 (81)	拡大家族 (73)	t 値
肯定感	3.67	3.81	.77
不安・苛立ち	3.26	3.29	.47
見捨てられ不安	2.63	2.71	.31
親密性	3.38	3.13	2.12 *
肯定的関与	3.86	3.80	.29
家事の分担	3.10	3.07	.36

・出生順位による差異

出産への肯定感において、第1子に比べ、第2子以降の方が高い。これは第1子においては、初めての出産経験であり、戸惑いや不安も高いが、第2子以降になると、母親はやや安心して、子どもの出産を肯定的に受け止められるようになると考えられる。

出生順位	第1子	第1子以外	t 値
肯定感	3.50	3.94	5.26 **
不安・苛立ち	3.25	3.26	.32
見捨てられ不安	2.71	2.56	.92
親密性	3.33	3.38	.78
肯定的関与	3.89	3.81	.64
家事の分担	3.16	3.04	1.89 +

・妊婦の就労状況による意識

妊婦の現在の就労状況を4群に分け、尺度得点ごとに分散分析を行ったところ、妊娠を機に、仕事を辞めた妊婦(退職群)にとっては、毎日仕事を行っていた生活からの変化も大きく、不安や苛立ちが強くなると考えられる。特に、それは常勤で働いている妊婦との差が大きく、仕事を辞めるということが、妊婦の意識としては、大きな影響を与えていると考えられる。

愛着における親密性が、退職者に比べ、非常勤で働く妊婦が高くなっている。これは、妊娠を機にというより、もともと親密性を求める妻は、常勤職や専業主婦というより、非常勤で働きながら、家庭を支えていく人が多いのではと考えられる。

また、夫の家事の分担では、専業主婦の値が低く、夫も専業主婦ということで、家事は任せており、ほとんど家庭のことは関与していないのではと考えられる。このことは、専業主婦であれば、当然家事全般は、妻がやることであり、夫の援助がほとんど得られないということであり、それは妻にとっては、かなりの負担になっているのではと考えられる。

就労状況	専業 (65)	非常勤 (16)	常勤 (42)	退職 (18)	F値
肯定感	3.73	3.60	3.66	3.53	0.69
不安・苛立ち	2.66	2.83	2.46	2.94	2.60 *
見捨てられ不安	2.71	2.69	2.80	2.52	0.32
親密性	4.19	4.76	4.37	3.97	2.23 +
肯定的関与	3.90	3.61	3.92	3.83	0.75
家事の分担	2.83	3.19	3.37	3.28	2.38 +

・妊婦の IWM による妊婦の意識と夫への思い
妊婦の IWM の 2 要因(見捨てられ不安・親密性)により、分散分析を行ったところ、肯定感において見捨てられ不安に主効果がみられ、また交互作用も見られた。さらに、夫の肯定的関与において交互作用がみられ、見捨てられ不安の低群において、親密性の低群より高群の方が夫の肯定的関与を感じ取っているということである。

Table 2 IWM(見捨てられ不安・親密性)から見た妊婦意識

見捨て不安	高群		低群		F値		
	高群	低群	高群	低群	不安・主	親密・主	交互
肯定感	3.54	3.79	3.98	3.70	3.66+	0.02	8.90**
不安・苛立ち	3.30	3.29	3.24	3.20	2.40	0.28	0.14
肯定的関与	3.79	3.90	4.18	3.72	0.65	2.00	5.17*
家事分担	3.10	3.04	3.20	3.10	1.31	1.40	0.13

**p<.01 *p<.05 +p<.10

愛着パターンによる妊婦の意識

・出産への肯定感

妊婦の出産への肯定感について、親密性の高群において、見捨てられ不安が低いと肯定感が高くなるが、見捨てられ不安が高い場合には、出産への肯定感が低くなる。これは、親密性とは、人と親しく関わったり、人に頼ったりできる人であり、これに産後ともなう見捨てられ不安、つまり、このままずっと家族としてやっていけるのだろうか、子育ての途中で自分は見放されるのではという不安がたかまり、大きく揺れている。親密な関係を持ち、さらに見捨てられる不安も低いと、出産への肯定感が高まるが、見捨てられ不安が高まると、肯定感は極端に低くなると考えられる。

・夫の肯定的関与

見捨てられ不安の高い群においては、親密性に関わらず、夫の肯定的関与をある程度感じているが、見捨てられ不安の低い群においては、親密性が高いと肯定的関与を感じられるが、低いと肯定的関与をあまり感じていないということである。つまり、見捨てられ不安が高い人にとって、親密な関係がうまく持てない場合、夫にその代償として、肯定的な関与を夫に強く求めているのではと考えられる。

(2)インタビュー調査の結果と考察

本研究で得られた概念は、大きくは3つのカテゴリー、つまり『妻の意識』『夫への意識』『夫婦関係の変化』である。妊娠期間においては、妻(妊婦)も夫も、【喜び】とともに多くの【戸惑いと不安】を感じていることが示された。特に妊婦にとっては、【妊娠ともなう変化】という形で、周囲の受け止め方や生活スタイル、対人関係の変化が生じるこ

とが、戸惑いと不安を強めているようであった。その一方で、妊婦にとっては、様々な【不安への対処】を行い、また【出産経験】というものが不安を和らげる側面もあった。

夫への意識では、夫の【自分優先の生活】態度が抽出されている。つまり、妊娠・出産という女性にとって非常に重要な体験であり、様々な変化を迫られる中で、夫がどこまでそれに合わせて変わろうとするか、あるいは変わらずにこれまでの自分の生活を優先するかは、重要なポイントであった。また、妻の妊娠ともなう【変化への理解】や【配慮とねぎらい】は、妻を支えるうえでは重要であった。最後に、夫婦関係においては、様々な側面で【関係性の変化】を感じているが、そこには、【妥協による協力関係】が生まれてきて、最終的には、【価値観の共有】ということが起こりうると考えられる。これらをまとめて、全体的は関係図を見ていく必要がある。

今回のインタビューから抽出された概念とサブカテゴリーを以下に示す。

サブカテゴリー	概念名
妻の意識	
喜びと実感	妊娠に対する喜び
	母としての実感と自覚
戸惑いと不安	妊娠に対する戸惑い
	妊娠してからの大変さ 夫の言動による傷つき
妊娠ともなう変化	周りの受け止めや家族構造の変化
	生活スタイルの変化への対応
	妊娠してからの対人関係の変化
不安への対処	しんどさへの対処
	周囲からの支え
出産経験	出産経験による不安の変化
気付き・成長	仕事上での変化・意義
	妊婦になってからの気づき
働きかけ	妻から夫への働きかけ
夫への意識	
夫の喜び	父となる喜び
	父親としての自覚・変化
戸惑いと不安	夫の不安
	夫の戸惑い
自分優先の生活	自分優先の生活
期待と理解	夫への期待
	夫の子育て方針
変化への理解	身体や生活の変化への理解
配慮とねぎらい	夫に対する肯定的評価
	夫から妻へのねぎらい
夫婦関係の変容	
関係性の変化	夫婦の関係性の変化
	互いの認識のズレ
	夫婦間の衝突
妥協による協力関係	妥協による協力関係
価値観の共有	夫婦としての価値観の共有

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計 3件)

内田利広・中谷沙恵子
出産を控えた夫婦における子育て支援の
可能性 - 妊婦へのインタビューを通して -
日本人間性心理学会第33回大会
2014年10月11～13日(南山大学)

中井裕子・大西正美・福本紘未・内田利広
母親の被養育体験と育児感情との関連
日本家族心理学会第31回大会
2014年7月19日～21日(京都)

内田利広・小泉隆平
妊婦の抱える不安と愛着パターンの関係
について - 出産への気持ちと夫の関わりを
めぐって -
第7回国際家族心理学会
2013年8月30日～9月1日(東京)

6．研究組織

(1)研究代表者

内田 利広 (UCHIDA Toshihiro)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20263999